



FROM 2021

聴覚障害に関わる支援人材育成を目的とした 遠隔手話教育システムの構築

国立大学法人 群馬大学
手話サポーター養成プロジェクト室



群馬県



群馬大学



日本財団

手話通訳者養成を大学から日本全国へ

「手話通訳」は、従来からのコミュニティ通訳はもちろんのこと、学術手話通訳や、電話リレーサービスの手話通訳オペレーターなど、高度専門職としての活躍が一層期待され、人材育成が急務の課題となっています。また、手話スキルは、特別支援学校教員やソーシャルワーカーなど、聴覚障害に関わる専門職にとって不可欠なものです。

群馬大学手話サポーター養成プロジェクト室では、第二言語習得理論に基づいた手話通訳技術習得の指導法を開発し、体系的なカリキュラムの整備に取り組んでいます。そして、それらの授業を、遠隔システムで全国に届けていきます。

目次

はじめに	・・・ 1
ごあいさつ	・・・ 2
プロジェクトの目標	・・・ 4
開設科目	・・・ 6
目指せる資格	・・・ 7
手話教育の特色	・・・ 8
授業風景	・・・ 10
オンライン授業	・・・ 12
養成実績	・・・ 16
受講生の声	・・・ 17
地域貢献	・・・ 18
関連研究	・・・ 19
スタッフ紹介	・・・ 20
おわりに	・・・ 26

はじめに



群馬大学共同教育学部 教授
日本財団助成事業プロジェクトリーダー
金澤 貴之

2017年度より国立大学法人群馬大学では、群馬県が制定した手話言語条例への学術機関としての貢献として、日本財団助成による群馬県との共催事業「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」（2019年度より「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」）を実施いたしました。これは、2つの目的によって成り立ちます。1点目は、大学生の養成です。すなわち、1年次に基本的な日本手話を習得し、3年次までに手話通訳養成カリキュラムを修了し、その上で4年次にはろう重複障害児者への支援技術を含む、特別支援学校教員等に必要の手話等のコミュニケーションスキルを習得することで、卒業までに高度な手話スキルを有する専門支援者として社会に送り出すというものです。そして2点目は、県内の手話通訳者向けに、高等教育機関での授業や学会発表等で求められる「学術手話通訳」に関する研修を実施するというものです。

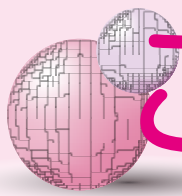
群馬県は2015年3月に全国の都道府県で3番目に手話言語条例を制定し、かつ、同年12月に前橋市でも同条例が制定されたことで、全国で初めて県と市の双方で同条例を制定した県となりました。さらには2021年4月現在、17ヶ所の市町村で同条例が制定され、全国屈指の手話言語条例制定県となっております。県条例においては聴覚障害児を対象とする学校における乳幼児期からの手話環境の整備等が記され、市町村条例においても学校における手話による支援が記されている自治体もあります。「手話先進県」の群馬県として、行政と学術機関とが一体となり、手話通訳スキルを身につけた専門支援者を県内に広く輩出していくとともに、全国のモデルとして「群馬方式」を広く情報発信していくべく、本事業を推進してまいりました。

そして2020年度末には4年目を終え、第一期生を社会に送り出すことができました（手話通訳者養成カリキュラム修了者35名、群馬県登録手話通訳者2名、盲ろう者向け通訳・介助者養成カリキュラム修了者6名）。加えて、2020年度はコロナ禍に見舞われたこともあり、これまでの授業をすべてオンラインに最適化させることができました。これにより、教室に集まらずとも、手話等を学べる環境も整いました。

現在、全国的な手話通訳人材の不足、電話リレーサービスの公共インフラ化、そして高等教育機関における聴覚障害学生への手話通訳ニーズへの対応の不十分さといった課題が山積しており、「若年層を対象とした手話通訳者養成」を真剣に考えていかなければ、高度職業人としての聴覚障害者の社会参加が大きく阻まれてしまう現実に直面しています。そのためには、高等教育機関で手話通訳者を養成できる体制を確立し、全国でその教育を受けられるようあらゆる環境を整備していくことが必要であろうと考えます。

そこで2021年度からは、これまでの4年間の事業をさらに発展させるべく、日本財団助成事業「聴覚障害に関わる支援人材育成を目的とした遠隔手話教育システムの構築」に着手しました。本事業の最終目標は、高度なスキルを持った手話通訳者の不足や、聴覚障害関連専門職の手話スキルの問題を解決すべく、手話教育研究拠点の連合体を形成し、遠隔ベースの手話教育システムを確立することにあります。「手話のチカラを群馬から」をキャッチコピーに、これまで進めてきた事業が花開いていき、全国の手話通訳養成、手話に関わる専門支援者養成の質向上に寄与できることを願っております。

皆様方からのご指導、ご鞭撻、そしてご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



ごあいさつ

THE POWER OF SIGN LANGUAGE,
THE POWER OF SIGN LANGUAGE,

COMING FROM GUNMA
COMING FROM GUNMA



群馬大学長

石崎 泰樹

Ishizaki Yasuki

大学で育てる共生社会の担い手

群馬大学は、全国的にみても先駆的に障害学生支援に取り組んできた大学の1つです。特に手話通訳を必要とする聴覚障害学生に対しては、2004年度から専門的な手話通訳技術を持つ職員を採用するなど、全国的に注目されています。2010年度からは、障害学生支援室を全学組織化し、その意思決定のもと、専門教職員が日々、障害のある学生の支援にあたっています。

こうした蓄積のもと、2017年度からは群馬県との共同事業として、また日本財団助成事業として、手話サポーター養成プロジェクトを立ち上げ、本学学生が在学中に手話通訳者資格が取得できるカリキュラムを開発してまいりました。2021年度からは、新規事業（第二期事業）として、遠隔通信技術を活用し、全国的に不足している手話に関わる専門職の育成に取り組んでまいります。本事業を通じて、聴覚障害に関する教育及び聴覚障害学生に対する教育法の開発が進み、持続可能な社会に向けた障害者支援教育に関する研究が促進されることを期待しています。



群馬県知事
山本 一太
Yamamoto Ichita

誰一人取り残さない 自立分散型社会の実現に向けて

群馬県では、昨年 12 月、本県の 20 年後の目指す姿を描いた「新・群馬県総合計画（ビジョン）」を策定しました。このビジョンでは、「年齢や性別、国籍、障害の有無等にかかわらず、すべての県民が誰一人取り残されることなく、自ら思い描く人生を生き、幸福を実感できる自立分散型の社会」を構築することを目指しています。

本県と群馬大学は、平成 29 年度から手話通訳者の養成を共同で実施しており、今年度からは遠隔手話教育システムの構築をテーマに取り組みこととなりました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、手話通訳者の養成などにも影響を与えており、本テーマは今後の養成事業を考える上でも、また、自立分散型社会の実現に向けても、大変有意義なものであると考えています。

本事業により、手話通訳者の確保と質の向上が図られるとともに、ろう者への支援が大きく前進することを期待しています。



日本財団
公益事業部 常務理事
吉倉 和宏
Yoshikura Kazuhiro

変化する時代の手話教育に向けて

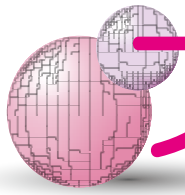
この 2021 年度から第二期の事業が始まりました。本年度は、私たちを取り巻く環境が大きく変化する年になると感じています。

特に新型コロナウイルス感染症が人と人の距離感に大きな変化をもたらしています。身近な人との心理的距離は遠くなり、物理的に遠距離の人とはリモートの活用により心理的には近くなったように感じるようになりました。これまでと異なる、望遠レンズの圧縮効果のような距離感が日常化しています。

また、東京オリンピック・パラリンピックが開催され、多くのアスリートたちの活躍を目の当たりにしています。無観客によりその場に人がいなくても、応援を感じ取り力に変える能力を私たちが持っている、と思わずにられません。

そして、今年から新たな法律により電話リレーサービスが開始されました。全ての電話利用者が少しずつ資金を出し支えあう仕組みが新設されただけでなく、プロフェッショナルである手話通訳者がその力をより発揮できる職業が新たに誕生しました。

群馬大学によるリモートで手話通訳者を育成する試みは、この時代の変化において求められる多くの要素を備えています。多くの皆様の参加とご支援により、志の距離が近い方々が集まり、事業が広く根付いていくことを心より期待しています。



プロジェクトの目標

👍 日本手話の高度な言語運用力の習得を可能にする指導法の開発

言語学、心理学、脳科学、教育学などの学問領域が関わる第二言語習得理論、外国語教授法、通訳理論の学術的知見と研究に基づいた教育の PDCA サイクルにより、日本手話の高度な言語運用力の習得が可能になるように目指しています。

👍 遠隔システムをベースとした手話習得・通訳養成カリキュラムの構築

「いつでも、誰でも、どこでも」。高等教育機関における正規科目として開講する他、単位互換制度、聴講生、公開講座、高等学校（自治体）設定科目としての選択科目「手話」等、さまざまな形での受講を、遠隔システムによって可能にすることを目指しています。

👍 日本手話の習得・通訳養成に関わる指導者の養成

第二言語／外国語習得理論・指導法、通訳理論・通訳養成指導法、学習理論、日本手話の言語学的知識と評価法等の知識と指導実践力を有する指導者を増やしていくことを目指します。

👍 専門職における手話スキル等の養成・研修の遠隔カリキュラム化と運用

聴覚障害や、聴覚を含む重複障害を持つ子ども／大人における発達の課題や認知・行動特性を理解し、教育・支援に反映させて潜在的な能力を最大限に伸ばせるようにするスキルや、そのために十分な意思疎通を図れるコミュニケーションスキルの習得を目的として、手話習得指導プログラムと高等教育機関で開講されている聴覚障害関連専門科目を組み合わせた専門職向けの遠隔カリキュラムを公開していくことを目指しています。

👍 複数の大学間連携による「手話教育研究拠点連合体」の形成

手話教育や専門職養成を行っている大学間で、研究交流、講師招聘、シンポジウムの共同開催等を通じて、「手話教育研究拠点の連合体」を形成していくことを目指しています。

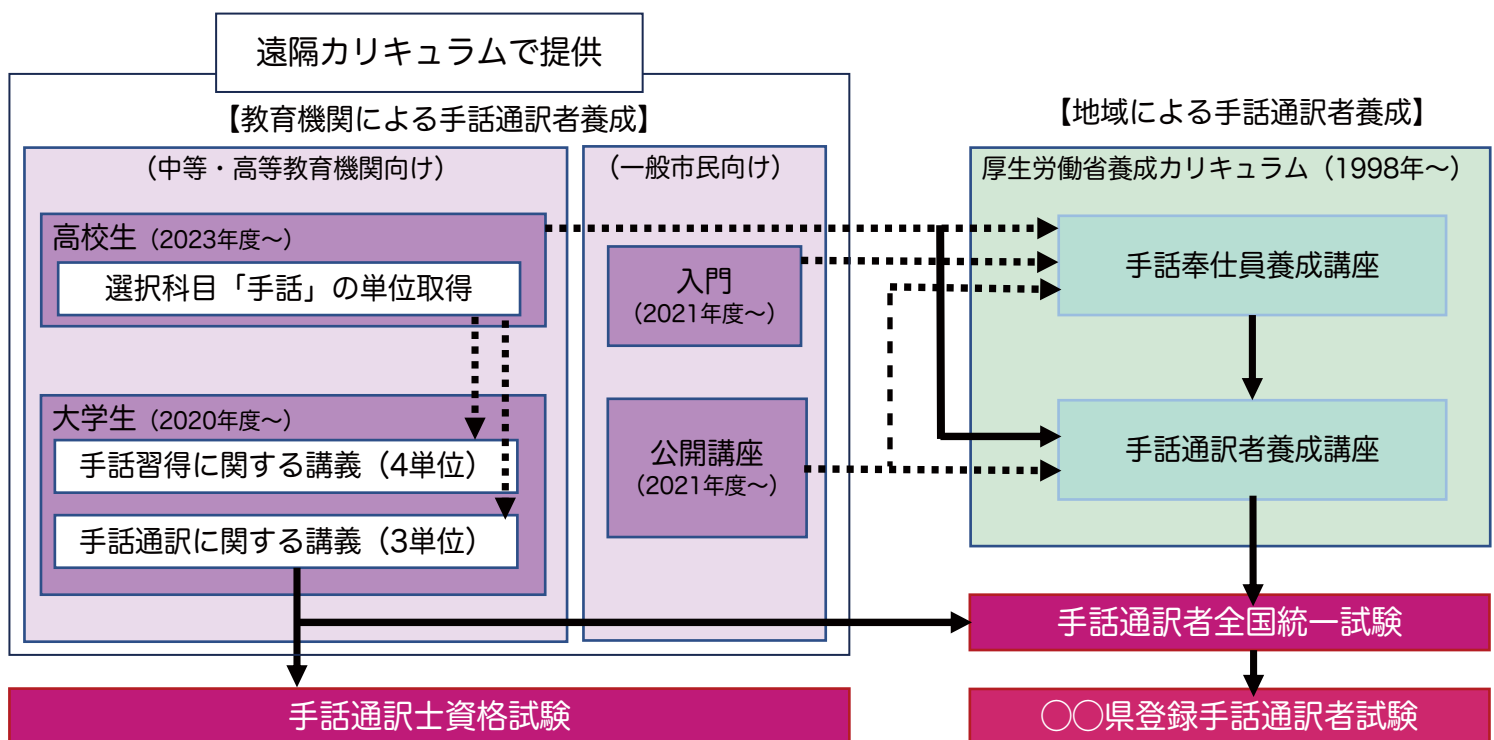


SDGs としての取り組み



現在、全国的な手話通訳人材の不足、電話リレーサービスの公共インフラ化、高等教育機関における聴覚障害学生への手話通訳ニーズの対応の不十分さといった課題が山積しており、若年層を対象とした手話通訳者養成を真剣に考えていかなければ、聴覚障害者の社会参加が大きく阻まれてしまう現実と直面しています。

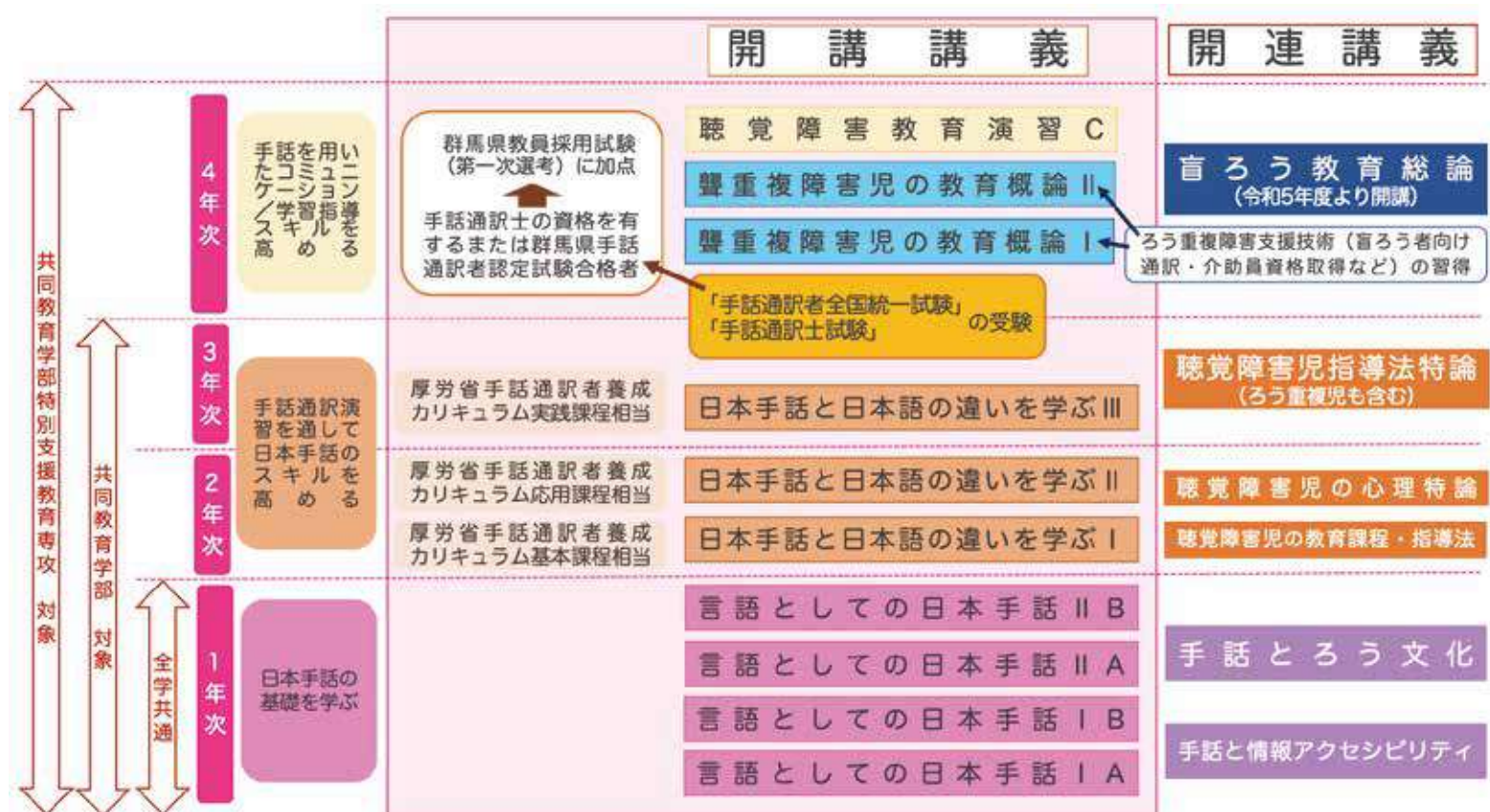
本プロジェクトは、SDGs 達成を目指す教育研究活動における群馬大学の取り組みの1つとして、高等教育機関において手話教育研究拠点の連合体を形成し、遠隔ベースの手話教育システムを確立させることで、全国の手話通訳養成、手話に関わる専門支援者養成の質向上を目指しています。



遠隔手話教育システムの将来構想

開設科目

「言語としての日本手話」(ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡB)と「日本手話と日本語の違いを学ぶ」(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)の7つの開設科目を核として、手話通訳に関わる資格試験にチャレンジ可能な日本手話・手話通訳スキルを獲得し、そのスキルを活かして教育場面を中心に現場での実践力を高める科目を展開しています。



※ 所属学部・専攻によって、履修可能な科目や条件が異なります。
 ※ 授業の一部を、公開講座として体験していただくことができます。
 詳しくは、地域貢献のページをご覧ください。





目指せる資格

手話通訳の資格

「日本手話と日本語の違いを学ぶ」(I・II・III)は、群馬県から厚生労働省手話通訳者養成カリキュラム相当との認定を受けています。従って、「日本手話と日本語の違いを学ぶIII」まで履修を終えると、「手話通訳者全国統一試験」「群馬県登録手話通訳者試験」を経て、群馬県の登録手話通訳者の資格取得が可能となります。他の都道府県の登録手話通訳者資格の取得については、手話サポーター養成プロジェクト室までお問い合わせください。

また、「手話通訳技能認定試験(手話通訳士試験)」に合格し、所定の手続きをふむことで、厚生労働省令により定める公的資格「手話通訳士」を取得することができます。裁判や政見放送の手話通訳は、「手話通訳士」の資格が必要です。

なお、群馬県の教員採用試験では、上記の手話通訳資格について「有資格者による加点制度」の対象となっています。



手話通訳士、各地方自治体の登録手話通訳者の資格取得を目指す学生向けに、実技試験対策を兼ねた指導を行っています。通訳練習には、資格認定試験で出題された過去問や、習得不十分な言語知識を含む素材を用います。指導では、1人1人の学生について、手話通訳スキルの伸び悩みの背景要因を、「日本手話の理解と表出のスムーズさ」「通訳内容に関する知識(世界知識)」「通訳に関する宣言的知識と手続き的知識」の観点から探り、弱点を克服するための学習内容やトレーニング方法を、個別に提案していきます。

盲ろう者向け通訳・介助員の資格

「日本手話と日本語の違いを学ぶ」(I・II・III)の履修を終えた学生が、群馬県盲ろう者向け通訳・介助員の資格を得られる科目を開設しています。取得には、厚生労働省盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラムに相当する、所定の科目について単位を取得し、さらにNPO法人群馬盲ろう者つるの会の行事に参加することが条件となっています。

手話教育の特色

特色 1

第二言語として学ぶ日本手話

日本手話は、日本語とは異なる独自の言語構造を持つ自然言語です。幼少時から手話でコミュニケーションをとる環境で育ってきた聞こえない子どもや大人の中には、日本手話を母語／第一言語とする人たちがいます。人間と動物の違いは、思考する言語を有していることにあります。人間らしく生きるためには、自由に繰ることが出来る言語が必要不可欠です。

群馬大学では、日本手話の言語マイノリティである聞こえない人々の学び、労働、社会生活等を支える人材を養成しています。あなたの使用言語に日本手話を加えることにチャレンジしてみませんか。

特色 2

第二言語習得理論を取り入れた指導

私たちは、週数時間程度の学習で、日本手話を流暢に使えるようになるにはどのような指導や学習が効果的なのか問い続けています。第二言語習得研究は、言語学、心理学、脳科学、教育学など多くの専門領域が関わる学際的分野ですが、第二言語としての手話言語習得研究は、世界的に見てもごくわずかしか行われていません。そのため、音声言語における第二言語習得理論や外国語教授法を応用しつつ、視覚 - 身体動作モダリティを使用するという手話言語の特性に合った指導法を実践的に試みています。

特色 4

ろう者 / 聴者教員の協働による指導

群馬大学では、日本手話の習得から高度な手話通訳の訓練まで、すべての学習段階で日本手話ネイティブの表出・訳出表現をモデルとしています。そして、教員スタッフ自身が、聞こえる／聞こえないに関わらず、ろう文化と聴文化のはざま、異文化ギャップやコンフリクトを日々体験し、協働へと昇華させていくことを繰り返しています。この中で、日本手話と日本語の言語表現の違い、ろう者と聴者のものごとの受け止め方や考え方の違いに対する気づきを深め、ただ手話ができるだけではない、ろう者を理解できる支援者としての人材育成の指導に活かしています。

特色 5

成人の学習者像に基づいたカリキュラム

高等教育の段階から日本手話を学び始めようとするみなさんは、すでに日本語を母語として獲得し、また英語等を第二言語として学習してきた経験があります。これを最大限に活かし、母語（日本語）で身につけた概念や言語表現を、第二言語（日本手話）ではどのような言語形式・表現で表すのか（言語規則）を分析的に学習するスタイルをとっています。

また、できるだけ早期に言語規則を知識として一通り学習し、平易な文や会話だけでなく、母語で語るような高度な内容を練習や実践で取り扱うようにして、新しい言語習得に対するモチベーションを高めるようにしています。

特色 3

通訳理論を取り入れた指導

日本手話の言語運用能力の4つの要素（文法的能力、社会言語的能力、談話的能力、方略的能力）をバランス良く兼ね備えることを目標とし、手話通訳士、各都道府県登録手話通訳者の資格取得を目指すことができるようにプログラムを組んでいます。その中で取り入れているのが、音声言語の通訳訓練法である、ディクテーション、シャドーイング、リプロダクション、サマライジング、クイックレスポンス、サイト・トランスレーションなどを応用した手話通訳演習です。受講生の日本手話の学習進度と、通訳の作業プロセスにおける課題を複合的に評価しながら、1人1人に合った訓練法を提案しています。



特色 6

カリキュラム・マネジメント

日本手話のさまざまな言語規則について、学習者がどのような順序で習得していくのか（習得しやすい／しにくい文法項目は何か）は、よくわかっていません。そのため、日本手話学習者の手話表現における誤りを、「その時点における学習者の習得状態を映し出す鏡」であると捉え、なぜその文法項目や表現が適切に使われないのか、第二言語習得理論に基づき、その原因に対する仮説を立てて、原因仮説に応じた指導方法／内容を、次の授業に反映させていくというPDCAサイクルをとっています。

また、日本手話や手話通訳のスキルが無理なく高められるように、授業当日の内容についてステップを踏んでいくと誰にでもできるように設計された反転学習を宿題に取り入れています。

特色 7

効果的なオンライン授業の開発

コロナ禍により、高等教育機関では2020年度春から一気に授業のオンライン化が進みました。私たちは、「学びの質は落とさない」を合言葉に、立体視ができない二次元映像の弱点をカバーする教材や、鮮明で途切れのない手話モデル映像、詳細に記された資料の視聴手段を確保するとともに、授業では、第二言語学習に不可欠なアクティブラーニングや演習・実技を効果的に行えるように、手話の授業に最適化したWeb会議ツールの使用方法を開発してきました。これからも私たちは、「オンラインだからこそ、より深く日本手話が身についた」と言っていただけのことを目指して開発を続けていきます。

授業風景



手話の複雑な動きや顔の表情を見逃すまいと真剣な表情で



こうかな？ 受講生同士で確認しながら手話の表出練習を

訳出した手話表現を撮影してチェック！



※本ページではコロナ禍以前に撮影した写真が含まれています



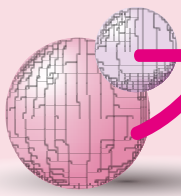
オンラインでも学びの質を落とさないために教材研究を重ねて



オンライン授業もすっかり日常風景に



指点字、触手話、移動介助。盲ろう児者支援に必要な知識と技能を学ぶ



オンライン授業

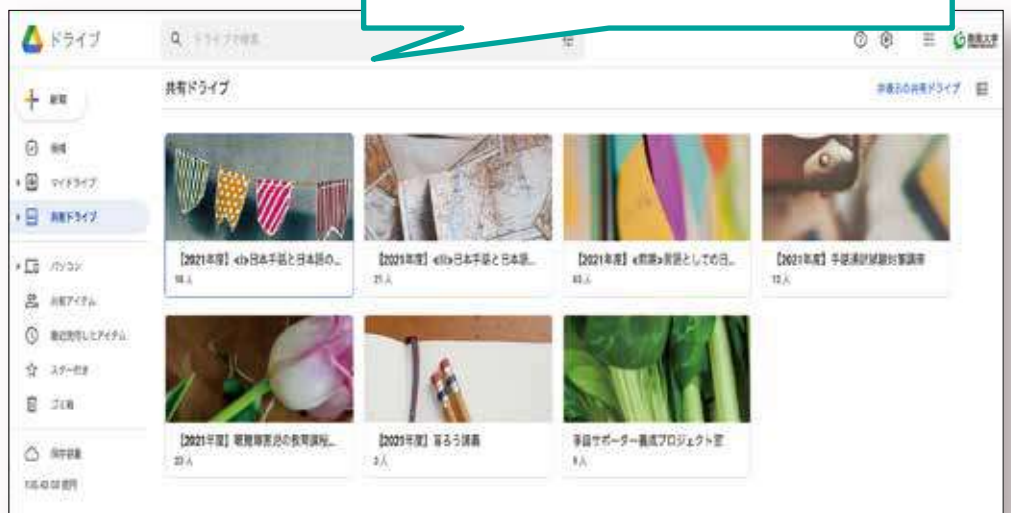
反転授業を行うため文法解説の動画を前撮りすることも



ろう者の教員が手話表現の見本動画を撮影

01. 授業準備

クラウドサービスの [Google ドライブ] 上に各講義ごとの共有フォルダを作成。受講学生は全員フォルダにアクセスできます。



講義日のフォルダをクリックすると、次回までの課題が出てきます。課題は基本的に次回の講義で学ぶ題材を使用。この日は、
①単語 50 個暗記→表出した動画を提出、
②手話動画を見て内容に関する問題に解答→提出（要旨課題）、
③手話動画を見て日本語に翻訳→日本語訳文を提出（翻訳課題）。

02. 事前課題

講義の指導案と指導ポイント一覧の作成。

指導ポイントは、動画の日本語訳、手話のラベル、表現のポイント解説が書かれています。数人の教員で1つの授業を担当しても、同様の内容と質を担保した授業が可能に。

1. 事前課題のふりかえり (20分)

(1)単語で動きがおかしくなかったものがあれば確認。また、単語表現の留意ポイントを抑えた表出が
いるかもチェックしておく。

(2)要旨課題・翻訳課題

→自分の担当学生
の要旨課題・翻訳課題の解答をすべて一掃によかったところ、少し
気になったところを、書きし、
どうしてできていないのか、
なぜ読みとれなかったのかの
<指導のポイント>

読みとりは全体的にきちんとできているので、事前課題は

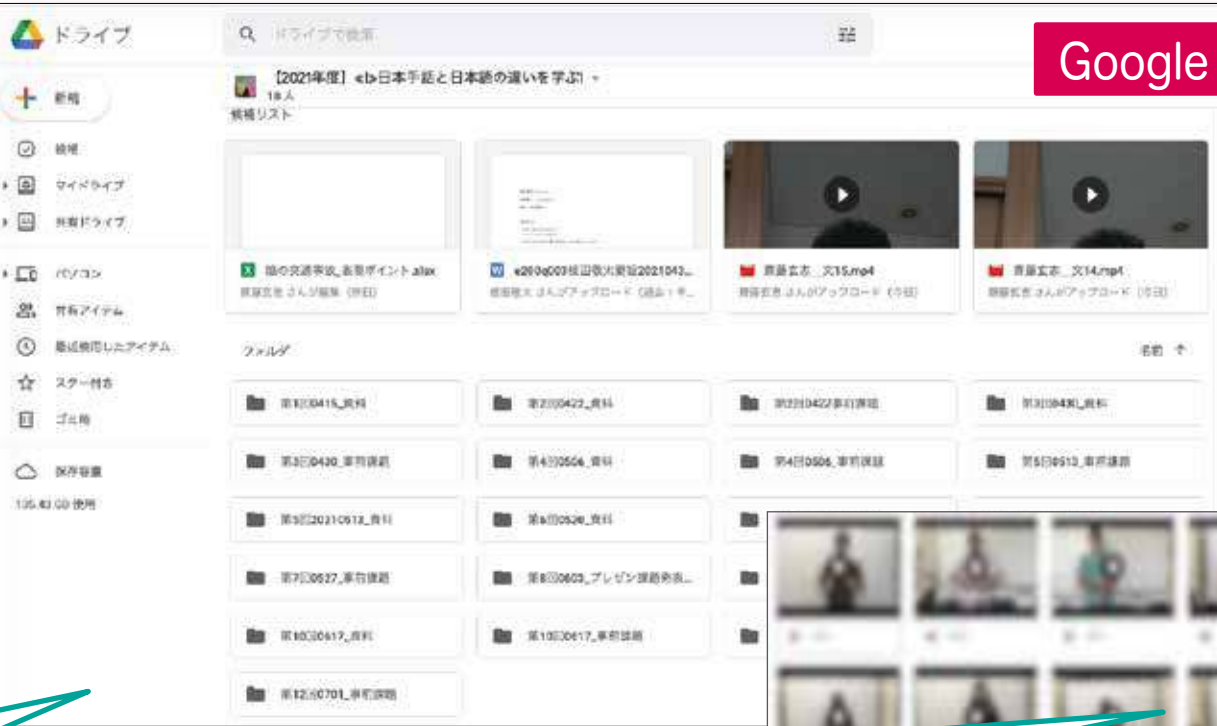
2. 日本語→日本語の整理 (40分): 40分で済ませるやり方



演者	内容
坂井さん	日本語文 (チャイムの音) (ドアを開ける) どうして (ドアを開ける) (すみません) / どうぞ (で)
本田さん	日本語文 こんにちは。私、群馬電気の本田と申します。修理の件でお願いしました。 ラベル文 / こんにちは/PT/群馬電気/本田/修理の件でお願いしました。
坂井さん	日本語文 お待ちしました。どうぞ。 ラベル文 / 分かる / どうぞ (聞く) /
本田さん	日本語文 本日はどうぞよろしくお願いいたします。こちら名前になりますので、お渡しいたします。 ラベル文 / 名前/入ります Y (両手でする) / 今日/よろしく (敬語) /
坂井さん	日本語文 はい、ありがとうございます。 ラベル文 (受け取る) / ありがとうございます /
本田さん	日本語文 では、失礼してもよろしいでしょうか? ラベル文 / 入る (OK) / 構いませんか? /
坂井さん	日本語文 お願いします。パソコンがあるのはこの部屋です。

Dropbox

Dropbox で作成したデータや動画を共有。教員間で作業進捗状況を確認しながら分担して準備を進めます。



Google ドライブ

提出された課題の動画

提出された課題 (動画、データファイル) は Google ドライブ上で確認できます。確認課題を全て提出するのに1時間~2時間かかるようですが、毎回きっちり提出してくれます。なお、動画撮影と動画提出はスマホ1台で作業は完了します。学生のほうがスマホやアプリの操作は慣れており、一度やり方を覚えると後はスムーズです。

オンライン授業

03. 授業中

Zoom



学生は Google ドライブから当日使用する資料をダウンロード、印刷。講義で学ぶ手話表現は動画ファイルいつでも何度でもなめらかな映像をみることができます。



Zoomで授業！
ブレイクアウトルーム機能を使ってグループワークを行うこともあります。

04. 授業後

Google アンケートフォーム

0511 「言語としての日本手話IA」リアクションシート

5月11日(火)「言語としての日本手話IA」の出欠確認および成績評価に用います。参加した学生は必ず回答してください。

担当した教員の名前を選択してください。(複数選択可)

川端
 二神
 能美
 下島
 中野

学籍番号(日本語で)
記述式テキスト(短文)

その他、感想など
45件の回答

肯定の表現の時に顔を出したり引いたりするのを忘れてしまうことがあったので気をつけたいと思いました。

共同教育学部の手話表現が動画ではやすぎで全くわからなかったが、今回の授業で初めからの動画で少しわかった。

肯定だけで8つ以上見えるのが大変です。

肯定表現が沢山あって覚えるのが大変だが、手を動かしてやっていくうちにだんだん覚えてきました。

講義に関する質問・感想などは、Googleフォームを使用し、オンライン上でアンケートを集計。



Zoomの画面共有機能を使い、iPadで提示したスライドに書き込みをしながら説明

「手話とろう文化」スキットを教員が熱演!



講師から手話の訳出表現を丁寧にフィードバック

YouTube



「次回の講義資料を Google ドライブにアップしました!」等の簡単なお知らせ公式 LINE 上で。
学生からの個別の質問にも対応します。

公式 LINE



講義終了後、教員は Zoom で録画した講義動画を YouTube にアップロード。学生にメールで URL を配信。URL を添付しているだけなので、データは重くなりません。接続トラブルで受講できなかった場合の学習や授業の復習に活用してもらっています。

養成実績

厚生労働省手話通訳者養成カリキュラム 全課程修了者数

年度	修了者数	備考
2020	16	
2019	17	うち2020年度群馬県認定手話通訳者試験1名合格
2018	1	
2017	1	うち2019年度群馬県認定手話通訳者試験1名合格
合計	35名	

全国手話検定試験

年度	1級	準1級	2級	3級	4級	5級
2020※1	3	2	5	2	5	-
2019※2	-	2	10	1	12	10
2018	-	-	10	6	21	2
合計	3	4	25	9	38	12

※1 COVID-19の影響により、2021年3月実施のインターネット受験を個別に申し込み・受験となったため、自己申告をもとに作成

※2 再実施の受験者を除く（台風の影響による中止）

厚生労働省盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム 全課程修了者数

年度	修了者数
2020	3
2019	3
合計	6名





教育学部 障害児教育専攻(卒業生)
橋本 朱音

聴者とろう者が自分の言葉で伝え合う支援を求めて

私が手話サポーター養成プロジェクト室の講義を受講しようと思ったキッカケは、手話の語彙を増やしたいと思ったことと表現力を身につけたかったからです。これらの講義では、本やテキストだけでは学ぶことのできない生きた手話を学ぶことができました。また、手話だけでなくろう文化について学ぶこともあり、ろう者にとって分かりやすい表現について考える機会にもなりました。また、手話から日本語に直す練習もあり、聴者にとって分かりやすい日本語についても多く考えることもできました。知的障害を併せもつろう者や盲ろう者と出会う機会もあり、かかわり方や支援方法を学ぶことができました。私は現在、知的障害特別支援学校で働いています。表情を大事にしたり、伝えたい言葉を端的に伝えたりと学んだことが仕事に活かしています。また、聴者とろう者が自分の言葉で伝え合うお手伝いのできたらいいなと強く想い続けています。



教育学部 障害児教育専攻(卒業生)
神塚 香朱美

盲ろう者との出会いから、充実した盲ろう者支援を学んで

聴覚障害教育 D・E の盲ろう者支援の講義を受けました。私は個人的にアメリカに研修参加し、盲ろう者に会ったことから、盲ろう者支援に興味があり、受講しました。講義を受講し、基本的な盲ろう者の知識、制度だけでなく、実際に盲ろう者と会い、外へ出て実習など非常に充実した講義でした。

講義で終わるだけでなく、学んだことを生かして、地域の盲ろう団体のイベントに参加したり、さらに知識を付けていきたいです。



教育学部 障害児教育専攻(卒業生)
江原 汐音

手話通訳者全国統一試験に合格！

私は大学に入って初めてろう者と出会い、日本手話の文法やろう文化等に触れました。最初はろう講師の方の言っていることが文字情報なしでは分からず、初めて“伝わらない”という経験をし、そこからろう者と話ができるように手話を学びたいと思いました。日常会話程度の手話ができるようになってから手話通訳としてのスキルを学ぶための講義が始まり、日本語と日本手話の文法の違いを体系的に学びました。言語の違いを意識するとかえって翻訳がうまくいかないこともありましたが、プロジェクト室の先生方にアドバイスをいただきながら徐々にそのスキルを身に付けていけたと感じています。この丁寧な指導や気軽に相談できる環境があったからこそ、手話通訳者全国統一試験に合格できました。また、手話通訳のスキルだけでなく、手話での絵本の読み聞かせ方や算数の問題の提示の仕方、国語の文章の読み方などの内容が組み込まれた講義もあり、将来教育現場に出る学生のことを考慮されていて普段からボランティア等でろう児と関わっていた私にとってはすぐに実践できる内容でした。今後は大学院にて手話スキルを活かして聴覚障害教育について研究を進め、いずれは教育現場に身を置きたいと考えております。

公開講座

群馬大学では、本学がもつ教育・研究の成果を知識と技として広く社会に開放し、地域社会における教育文化の向上に資することを目的に、1988年度から公開講座を実施しています。

手話サポーター養成プロジェクト室では、日本財団助成事業「聴覚障害に関わる支援人材育成を目的とした遠隔手話教育システムの構築」の一環として、人材育成の柱である「日本手話を学ぶ」「手話通訳トレーニングを通して日本手話の言語運用スキルを高める」「専門職として手話の活用スキルを磨く」をねらいとした開講科目の一部を、公開講座で受講いただけるようにしています。

いずれの講義も、Zoom を利用したオンラインで実施いたしますので、遠方の方もぜひご参加ください。また、一部の講義ではオンデマンド配信を行っております。

各講座の詳細は、群馬大学公開講座ホームページをご覧ください。受講にはお申し込みが必要となります。



高校向け企画

手話サポーター養成プロジェクト室では、群馬大学共同教育学部が提供する高等学校等向け模擬授業として、日本手話に関する授業をオンラインで提供しています。小中学校の「総合的な学習の時間」、高校の「総合的な探究の時間」等を活用した手話に触れる体験的な授業実践がさまざまな学校で行われていますが、当プロジェクトで提供する授業では、大学ならではの「第二言語としての手話の学び」を体験していただくことができます。

<聴覚特別支援学校向け>

『日本手話と日本語の違いを見つけよう』

ふだん何気なく使っている日本手話と日本語。日本語から日本手話への翻訳を通して、二つの言語の表現や文化の違いを学びます。

<一般高校向け>

『知ろう！ 学ぼう！ 日本手話』

日本手話は、英語などと同じく、独立した言語構造を持つ自然言語の一つです。

この講義では、日本手話の言語構造の基礎について知り、疑問文等の日本手話の表し方を学びます。

講師派遣

手話サポーター養成プロジェクト室では、地方自治体、学校、企業などの研修や集まりに、手話習得・手話通訳教育や手話の法制化等、豊富なトピックスを持つ講師を派遣しています。オンライン、対面両方に対応できます。



日本財団助成事業「聴覚障害に関わる支援人材育成を目的とした遠隔手話教育システムの構築」のプロジェクトに関わる各種の関連研究を行っています。

▶ 電話リレーサービスの担い手となる通訳者の養成のための研究

財源:厚生労働科学研究費
区分:障害者政策総合研究事業
研究期間:2020年4月1日~2022年3月31日
研究代表者:中野 聡子



▶ 学術手話通訳者を対象とした日本手話習得再教育プログラムの開発

財源:文部科学省・日本学術振興会科学研究費
区分:基盤研究B
研究期間:2019年4月1日~2023年3月31日
研究代表者:中野 聡子



▶ 高校選択科目「手話」の実現に向けたカリキュラム開発

財源:文部科学省・日本学術振興会科学研究費
区分:挑戦的研究(萌芽)
研究期間:2019年6月28日~2022年3月31日
研究代表者:金澤 貴之



▶ 手話言語版MLAT(現代言語適性テスト)の開発と活用

財源:文部科学省・日本学術振興会科学研究費
区分:挑戦的研究(萌芽)
研究期間:2019年6月28日~2022年3月31日
研究代表者:中野 聡子



▶ 日本手話学習者の音韻の誤用分析と明示的指導による学習効果

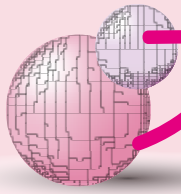
財源:文部科学省・日本学術振興会科学研究費
区分:若手研究
研究期間:2020年4月1日~2023年3月31日
研究代表者:能美 由希子



▶ 聴覚障害学生の合理的配慮に関する意思表示を支える心理教育的プログラムの開発

財源:文部科学省・日本学術振興会科学研究費
区分:基盤研究C
研究期間:2020年4月1日~2023年3月31日
研究代表者:甲斐 更紗





スタッフ紹介

手話言語を保障するスキームを群馬から

学部生の頃、教育実習で当時東京で唯一手話を幼児期から用いていたろう学校に配属されたことをきっかけに、「手話を覚えなくてもろう学校の教員になれる」という大学での教育のあり方に疑問を感じ、「なぜ、ろう学校で手話が使われてこなかったのか?」という疑問を持って、ろう教育の社会的研究に取り組み始めました。ろう学校での手話の位置づけについて、修士論文のテーマとして取り組む一方で、初めて出会った同年代のろうの大学院生から、「ろう教育の研究をしているのに、手話もできないの?」と怒られつつ、ろうの方々とのつきあいの中で、手話を学んでいきました。

その後、聴覚障害のある学生が群馬大学教育学部に入学したこと、そしてその翌年には手話通訳を求めるろう学生が入学したことで、大学としてろう学生の情報保障にどう応えるか、特に手話通訳ニーズにどう応えるかが、自分にとってライフワークの1つとなっていきました。

そして1つ1つの課題をクリアしつつたどり着いた答は、大学がろう学生にとって真にインクルーシブな場となるためには、究極的には、プロに授業の手話通訳をお願いするだけではなく、大学全体に手話が広がり、共に学ぶ学生たちみんなが手話で話せるような環境を実現させなければならない、ということです。

群馬大学に手話の花が咲き、それが広がっていくことを、ぜひみなさま、暖かく見守っていただき、そして応援していただけたらと願っております。



群馬大学共同教育学部 教授
日本財団事業プロジェクトリーダー
金澤 貴之

プロフィール

東京学芸大学を卒業、同大学院修士課程を修了し、筑波大学大学院博士課程を中退。筑波大学文部技官、助手を経て、2000年4月から、群馬大学教育学部障害児教育講座に講師として着任。現在、同大学教授。「聾教育における手話の導入過程に関する一研究」で2013年3月博士(教育学)取得。以後、群馬県手話言語条例(案)研究会委員(座長代理)(2014年度)、前橋市手話言語条例制定研究会アドバイザー、同意見交換会委員(2015年度)、群馬県手話施策推進協議会委員(副会長)(2015年度～)等、群馬県内外の自治体の手話言語に関する施策推進に大きく寄与。日本高等教育聴覚障害学生支援ネットワーク(PEPNet-Japan)設立時の2004年度から運営委員として、全国の聴覚障害学生支援の体制整備に尽力。

主な著書

編著『聾教育の脱構築』(明石書店、2001年)

編著『一歩進んだ聴覚障害学生支援——組織で支える』(生活書院、2010年)

単著『手話の社会学——教育現場への手話導入における当事者性をめぐって』(生活書院、2013年)

聞こえない人々のインクルージョンを支える人材育成

5歳で失聴した私は小学校からずっと通常校でしたが、勉強は独学、友人とのコミュニケーションはなるべく避けて過ごしてきました。そんな人生が一変するきっかけとなったのが大学入学後に覚えて使い始めた手話です。授業でも生活の中のコミュニケーションでも、補聴器を通してだいたいわかっていると思い込んでいたものがいかに虚構であったかを知り驚きました。授業は手話サークルの友人たちがシフトを組んで有償ボランティアで通訳を行ってくれました。そして何より、手話を使うことで私は人とかかわり、ふれあい、人間らしさを取り戻すことができました。

大学院進学後、ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業の留学生として1年間学んだアメリカでは、Deaf people can do anything except hear. (ろう者は聞くこと以外は何でも出来る)を体現するロールモデルと社会環境を目の当たりにして、環境さえ整えば、耳の聞こえない自分にできないことは何もないという確信を得ました。

そのような私にとって、仕事も生活もすべてが手話とともにあります。とりわけ、仕事をするにあたって手話通訳者は自分の分身であり、一心同体の存在です。けれど、大学教員として行う教育、研究、その他の業務…、これらに従事する中で、手話通訳の等価性が担保されていないと感じることがありました。地方の大学への赴任をきっかけに、県の手話通訳派遣事務所のコーディネーターや手話通訳者団体の方々と手探りで学術場面を中心とした手話通訳者向け研修を行ったりするなどの試みを通して、現在は、第二言語としての日本手話学習者や手話通訳者の手話表現の分析を行い、手話習得や通訳養成上の課題を見出す研究を行っています。

本プロジェクトが、手話を通して、聞こえない子ども/大人のインクルージョンの実現を支える人々の輪を広げるきっかけになることを願ってやみません。



群馬大学共同教育学部 准教授
研究開発統括
中野 聡子

プロフィール

筑波大学人間学類心身障害学専攻を経て、筑波大学大学院心身障害学研究科修了。博士（心身障害学）。手話言語の認知 / 言語発達における研究では、日本初のろう者による博士号取得となった。

東京大学先端科学技術研究センターでは障害者支援機器開発の研究、広島大学と大阪大学では障害学生支援の仕事に従事。かたわら、学術手話通訳養成の研究に取り組み、関連論文を多数発表。また、地域の手話通訳者を対象とした研修を企画開催してきた。

主な著書

共著『聾教育の脱構築』（明石書店、2001年）

単著『大人の手話 子どもの手話 —手話にみる空間認知の発達—』（明石書店、2002年）

共著『手話による教養大学の挑戦 —ろう者が教え、ろう者が学ぶ—』（ミネルヴァ書房、2017年）

オンライン学術手話通訳教材集 <https://sl-interpreting.org/>（2019年6月公開）

スタッフ紹介



群馬大学 共同教育学部 助教
能美由希子

大学入学時、同期に聴覚障害学生が居たという偶然で、手話と出会いました。「手話ってかっこいいし楽しい!」と感じ、より多く手話に触れたいくなり、ろう者の集まりと聞けば国内外問わず出向いてきました。

スタートは、そんな「楽しい」という気持ち1つでしたが、ある時手話通訳の世界に踏み入れる決意をしました。あるろう者から「聞こえる人はいつでも手話をやめられるけれど、聞こえない私たちは聞こえる人と関わらずには生きていけない」と言われたことがきっかけです。楽しいだけではなく、ろう者とともに生きていこうと思ひ、より深くこの世界に関わるようになりました。

通訳の資格取得以降は、必要とあらばありとあらゆる現場に出向いて、手話通訳・要約筆記を行っています。通訳の立場だからこそ得られる、ろう者や通訳仲間からの優しさと厳しさに支えられながら、その奥深さに日々惹きつけられるばかりです。

私は手話が好きです。手話通訳が好きです。妊娠・出産で一時期は離れてしまいましたが、それでも快く出迎えてくれるろう者や通訳仲間を支えられて、再び手話や手話通訳の世界にどっぷり浸かっています。

この事業を通して、手話を楽しめる仲間の輪を、手話通訳の苦楽を共にできる通訳仲間の輪を、少しずつでも着実に広げていきたいです。

筑波大学第二学群人間学類卒業、筑波大学大学院博士後期課程人間総合科学研究科単位取得満期退学。大学院在籍中より、つくば市特別支援教育支援員、茨城県立聴覚障害者福祉センター「やすらぎ」手話通訳コーディネータとして勤務。現在、群馬大学 共同教育学部 助教、および日本手話通訳士協会政見放送実技講師。手話通訳士・要約筆記記者。専門は教育現場における情報保障で、住友生命(株)未来を強くする子育てプロジェクト第7回女性研究者奨励賞を受賞。本事業では、手話通訳養成にかかる指導法および教材の開発と授業実践・研究を主担当。



群馬大学 大学教育・学生支援機構
学生支援センター 産学官連携研究員
川端 伸哉

聞こえる人が音のない世界を「知る」ことは、未知の世界に足を踏み入れることと同じなのだと思います。それは、宇宙なのかもしれないし、銀河なのかもしれない。それは、単なる空想の世界であって、実は身近に存在しているのです。同時にその世界を「知る」ことで、これまで見えなかったものが見えるようになるかもしれません。私は生まれた時から、ずっと音のない世界の住人です。音のある世界を身近に感じるたびに、未だに驚きと発見があります。音のある方向に何があるのか。それを見つけるたびに、パンドラの箱を開けたような気持ちになります。そこには、音を教えてくれる人がいたからこそ、その箱を開けることができ、そのたびに人の繋がりを感じます。

手話というのは、音はないけれど、実は言語なのです。しかし、長い間言葉としてみなされず、様々な障壁、偏見がありました。それでも先人のろう者たちが大事に手話を守り抜いてきたからこそ、今やっと、手話が言語であることが認められたのです。群馬大学から「手話チカラ」の発信!ともに「手話チカラ」を育て、日本にあるもうひとつの言語、「日本手話」を身につけてみよう!きっと、あなたの概念が大きく変わることでしょう。そう、「日本手話」は素晴らしい言語なのだから。

つくば国際大学産業社会学部社会福祉学科卒業(上野益雄研究室)。日本社会事業大学大学院博士前期課程社会福祉研究科修了後、日本社会事業大学非常勤講師を経て、現在、群馬大学 学生支援センター産学官連携研究員および群馬大学非常勤講師。日本で初めて、日本手話(動画)で修士論文を提出。専門はLGBTQ、社会福祉、日本手話。群馬大学では、聾者による直接教授法による日本手話の指導を主担当。



群馬大学 大学教育・学生支援機構
学生支援センター 産学官連携研究員
下島 恭子

群馬大学大学院受験の際、聞こえる学生と同等の学ぶ権利を享受したいと日本手話による講義保障を申し出たところ、大学側で手話通訳が用意され、講義やゼミでは同時性の高い情報保障を受けながらの授業参加が叶いました。それから、はや15年が過ぎて、現在、高等教育機関で学ぶろう・難聴学生は増え、それに伴い講義の通訳者は専門の知識を有し学術用語に対応した通訳技術が求められるようになっていきます。

大学で学問の知識を吸収し、自分の力を高めたいと願っているろう・難聴学生の学習環境を支えられる通訳が用意されることは、学生の貴重なポテンシャルを引き上げる（活かす）ためにも早急な課題だと思います。

また、聞こえる学生も言語としての日本手話を学ぶ中で「ろう文化」と出会うでしょう。異なる文化を通して新しい観点を捉え、この社会の在りようを見つめ、共に考えていくことができたらと願っています。

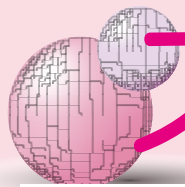
女子美術大学卒業後、群馬県聴覚障害者情報提供施設コミュニケーションプラザ聴覚障害者相談員を経て、群馬大学大学院教育学障害教育専攻修了。修士論文のテーマは「日本手話による教員からろう児への語りかけに関する一考察～うなずきの機能に着目して～」ろう・難聴児のためのフリースクール「群馬デフフリースクールココロ」を設立。群馬初の聴覚障害児に特化した放課後等デイサービス聴覚障害児児童クラブきらきらで管理者兼児童発達支援管理責任者を2年間務める。前橋国際大学非常勤講師・地域の手話奉仕員養成講座講師、県通訳者養成講座講師、PEPNet-Japan 第二事業手話通訳分析メンバーを経験。



群馬大学 共同教育学部 助教
二神 麗子

ろう者は日本手話という日本語とは異なる言語を使用しています。しかし、いざ、ろう者と接する機会があったとしても、最初は戸惑ってしまうかもしれません。もっと上手にコミュニケーションとりたかった、と思うかもしれません。大学卒業後、専門職として働くことになったら、生徒・お客さん・患者さんの中にろう者がいるかもしれません。そんなとき、日本手話がわからないために、サービスの提供に差が生じてしまうのは良くないですね。せっかく在籍中に日本手話が学べるのですから、ぜひ当プロジェクトの講義を受講し、日本手話という言語を学んでみてください。そうすると、日本手話というろう者の言語を理解するだけでなく、他言語・他文化に対する理解とリスペクトの気持ちを養い、コミュニケーションの面白さ、大切さを実感することができると思います。さらに学びを深めたい人は、手話通訳スキルも学ぶことができます。手話通訳の学びや実践を通して、聴者とろう者の橋渡しの役割を担うようになるかもしれません。それは聴者とろう者の間に差別のない、多文化共生社会の実現に向けた一歩になることでしょう。

日本社会事業大学社会福祉学部卒業、群馬大学大学院修士課程教育学研究科修了、立命館大学大学院博士後期課程先端総合学術研究科修了。博士（学術）。群馬県教育委員会の専門家チームとして聾学校のスクールソーシャルワーカーも務める。社会福祉士・手話通訳士。専門は社会福祉、聴覚障害ソーシャルワーク、障害者政策。研究テーマは手話言語条例の制定過程における当事者関与のあり方。



スタッフ紹介



群馬大学 共同教育学部 助教
甲斐 更紗

手話が皆さんにとっての心の拠り所でありますように。多くの方々が様々な面での手話アクセシビリティ向上における一翼を担う存在になれることを心から願っています。

私自身、ろう者（聴覚障害者）で、ろう学校（現在の聴覚特別支援学校）出身で、大学のときにノートテイクや手話通訳で授業を受け、大学院のとき、手話話者である指導教官と出会い、手話で直接指導が受けられた修士・博士課程は「手話で学ぶ、手話で議論する、手話で語り合う」ことが保障されたアカデミック的に貴重な時間でした。そのような経験があるからこそ、高等教育は障害学生にとっては知を深めてくれるものであり、知によって不公平さ、世の中の不条理を越えられる、考えることや語り合うことは生きる力になると考えています。それを支えるのは手話による直接的な対話、手話アクセシビリティや学術手話通訳による合理的配慮とかそういったものだ。

そして、私が大学生の時、手話や聞こえない・聞こえにくい自分を否定的に捉える仲間たち、コミュニケーションの制約を受けたため十分にこころが育ってきたとはいえない方々と出会ってきました。彼等の悲惨なこころの傷と向き合う中で、心理療法、心理アセスメントなどが音声を媒介としたものであるため、彼等が心理臨床の対象から除外されてきたという現状に愕然とし、彼等への手話による心理臨床分野へのエンロールメントマネジメントに取り組むようになりました。手話で学べる、手話で生きる、手話で仕事ができるという取り組みが大きく広がっていくことを願ってやみません。

多摩美術大学美術学部卒業。兵庫教育大学大学院修士課程・博士課程修了。博士（学校教育学）。鹿児島大学教育学部コーチング研究員、国立障害者リハビリテーションセンター研究所流動研究員、立命館大学生存学創成拠点ポスドクトラルフェロー、九州大学基幹教育院特任助教を経て、現在は群馬大学。臨床心理士、精神保健福祉士。その傍ら、10年間聴覚障害者情報提供施設で心理相談員、5年ほどろう学校のスクールカウンセラーに携わってきた。専門は臨床心理学、聴覚障害学生支援。主な業績として、『聴覚障害児の学習と指導 発達と心理学的基礎』(共著、2018年)、『聴覚障害学生の意思表示支援のためにー合理的配慮につなげる支援のあり方ー』(共著、2017年)、『聴覚障害者の心理臨床2』(共著、2008年)など。

プロフィール

群馬大学 共同教育学部 教授
霜田 浩信

東京学芸大学を卒業、同大学教育学研究科を修了後、社会福祉法人雲柱社 賀川学園児童指導員、東京学芸大学附属特別支援学校教諭、文教大学教育学部講師、准教授を経て、2009年群馬大学教育学部に着任、2016年より同大学教授。公認心理師、学校心理士、ガイダンスカウンセラー。講義では、知的障害児の心理概論、発達障害教育概論、障害児発達診断法、特別支援教育コーディネーターの役割と課題等を担当。専門は障害児心理学、応用行動分析学。知的障害児ならび発達障害児に対する心理・行動特性に応じたコミュニケーション、学習、行動への支援をテーマに研究を行っている。

プロフィール

群馬大学 共同教育学部 准教授
中村 保和

群馬大学を卒業、同大学大学院を修了後、東北大学大学院博士課程後期に編入学。2008年3月に博士号（教育学）を取得。2007年から着任した福井大学教育地域科学部発達科学講座講師を経て、2011年4月に群馬大学教育学部障害児教育講座に准教授として着任する（現在に至る）。講義では主に重複障害教育総論や盲ろう教育総論などを担当。専門は先天盲ろうおよび感覚障害を有する重度・重複障害の子どもの初期コミュニケーション。先天盲ろうに肢体不自由や知的障害、病弱等を併せ有する子どもたちとの係わり合いを通して、初期コミュニケーションや探索活動、学習をテーマとした研究を行っている。

プロフィール

群馬大学 共同教育学部 准教授
木村 素子

群馬大学を卒業、横浜国立大学大学院を修了後、筑波大学大学院博士五年一貫課程に入学。2011年、博士（障害科学）取得。2007年より宮崎大学教育文化学部障害児教育講座講師、2012年、同特別支援教育講座准教授を経て、2016年より群馬大学教育学部障害児教育講座に准教授として着任。講義では、障害児教育学総論、知的障害児の教育課程、障害児教育授業づくり特論、特別ニーズ教育特論等を担当。専門は、障害児教育学、聴覚障害教育学。米国における公立通学制ろう学校史研究のほか、近年は特別支援学校に在籍するろう重複障害児の在籍・支援に関する調査研究を行っている。



客員教授
金沢大学 人間社会研究域学校教育系 教授
武居 渡

担当授業「聴覚障害教育演習 C」



客員教授
筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授
白澤 麻弓

担当授業「聴覚障害教育演習 C」



客員准教授
東京都盲ろう者支援センター長
前田 晃秀

担当授業「聾重複障害児の教育概論Ⅰ」「聾重複障害児の教育概論Ⅱ」

障害学生サポートルーム・学生支援課紹介

障害学生サポートルーム

専門支援者 古川 香
 岩崎 紗恵
 関 采音

聴覚障害学生支援に関わるサポーター養成で連携しています

学務部 学生支援課

課長 姉崎 英広
副課長 田中 みゆき
学生支援係長 高平 和生
事務補佐員 宇敷 友紀

プロジェクトの事務的サポートを行っています。



群馬大学理事（教育・評価担当）
副学長

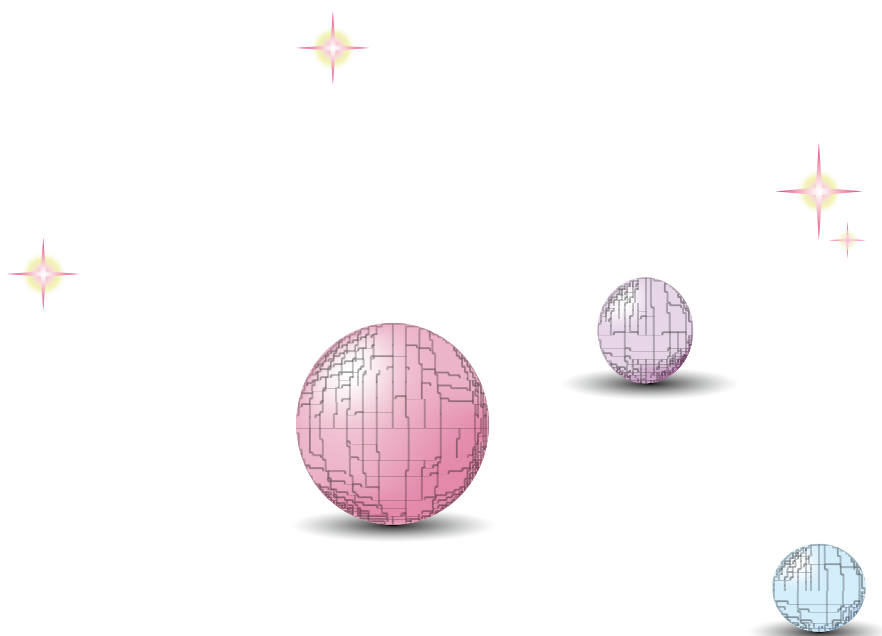
林 邦彦
Hayashi Kunihiko

現在、我が国のみならず世界各国で、多様性のある人々の共生社会の実現に向けて、様々な角度からの取り組みが進められております。2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、国連加盟193か国が2030年までの15年間で達成する目標です。17の大きな目標と、達成するための具体的な169のターゲットで構成されていますが、障害をもつ人々の生活と関連する事項が多く、特に、目標4. 質の高い教育、目標8. 働きがいと経済成長、目標10. 不平等の是正、目標11. 住み続けられる街づくり、目標17. パートナーシップの5目標では、ターゲットで直接障害について言及されています。

聴覚障害者の社会参画支援の取り組みの中でも、特に、遠隔手話通訳・文字通訳による聴覚障害者向けの「電話リレーサービス」は、公共インフラ化のニーズや高等教育機関で学ぶ障害学生や高度専門職に就く聴覚障害者支援のニーズの高まりもあり、支援人材の育成が強く求められております。

そうした中にあり、本新規事業は、2017年度から2020年度までの第一期事業の成果をもとに、遠隔通信技術によりコンテンツを全国配信していくものであり、来るべき共生社会の実現のための一助として、重要な役割を果たしていくものと確信しております。本事業の最終課程まで修了した学生が、手話通訳の資格を取得し、卒業後に特別支援学校などの専門分野の第一線で活躍してくれることを願っております。あわせて、すでに地域の専門職として活躍されている方々が、本事業の専門職向け公開講座を通じて学びの機会を得ることができ、専門性のさらなる向上に寄与することができればこの上ない喜びです。

群馬県は、群馬県はじめ各地の市町村で手話言語条例が制定された、いわば「手話の先進県」であり、聴覚障害児の手話の環境整備など、様々な施策が行われています。この事業を通して、ますます群馬県が、そして全国各地が、「誰もが暮らしやすい街」となるよう、さらにも一層、障害者支援の人材育成、支援体制の構築をめざしていきたいと考えております。





「聴覚障害に関わる支援人材育成を目的とした遠隔手話教育システムの構築」事業パンフレット

2021年8月発行

国立大学法人 群馬大学

手話サポーター養成プロジェクト室

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

<https://sign.hess.gunma-u.ac.jp>

TEL : 027-220-7157 (直通) FAX : 027-220-7390

MAIL : SLSDP@jimu.gunma-u.ac.jp



群馬県



群馬大学



日本財団

